

連載 2

新聞発表

西郷は、今回、目標の成果が得られたら、ただちにプレス発表することを、知り合いの記者達に、前もって知らせておいた。しかし、記者会見場に来てみてがっかりきた。一〇人ほどしか記者が集まっていない。しかも、テレビは民放が一局だけだ。NHKにも連絡を入れておいたが、なぜか取材には来ていない。

西郷はひとり心の中で毒づいた。役所の連中はNHKが好きなのだ。民法で放映されても、あまり喜ばない。

マスコミは、国民の理科離れを、われわれ研究者のせいにするが、いちばん悪いのは、マスコミではないか。せっかく、プレス発表しても、科学関係の記事は、三面記事以下の扱いしかしない。発表そのものを、まったく無視するところも多い。

どこかの馬鹿が、株で大もうけしたというくだらないニュースは大々的に取り上げるが、科学関連のニュースは、常に最低の扱いだ。

それに集まっている記者たちの科学知識レベルの低さといったらどうしようもない。先ほども、記者のひとりが堂々とこんなことを聞いてきた。

「西郷先生。先生のご説明で、今回発表されたことは大変な成果だということは、なんとなく分かったのですが、もう少し、分かりやすく説明していただけないでしょうか」

事前に、素人用の用語集までつくって渡しているのに、この始末である。これ以上分かりやすい説明などしようがないのだ。

それにもかかわらず

「一般市民の科学知識は小学生レベルだということを承知していただいたうえで、かみくだいて説明していただきたいのです」

などと、自分の頭が悪いことを棚に上げて、こちらの説明の仕方が悪いとでも言いたげだ。西郷は、記者をどなりつけようかと思ったが、思いとどまった。何とか、記事にしてもらわないと、来年の予算請求の時に、困ってしまう。

最近の役人は、口を開けば

「国民の税金を使っているのだから、十分な説明が必要です」と言う。

十人いれば、十人が同じ発言を繰り返す。説明責任というやつだろうが、そんなことを言っているから、捏造が後を絶たないのだ。金を使ったからといっ

て、そんなに自慢できる研究成果など、そう簡単に出るわけがない。

西郷は、韓国で起こったE S細胞捏造事件のことを思い出していた。あれも気の毒な事件だった。国から大金をもらったら、それに見合う成果を出さなければならない。ばかな国民は、金を出せばすぐに成果が出ると期待する。これは大きなプレッシャーとなる。

科学記事をろくに読んだことのない役人がネイチャーやサイエンスに論文が出なければ、役立たずの研究だとののしる。

ただ、西郷から見ると、テレビ局に告発されたソウル大学の教授のやり方はあまりにも稚拙に思えた。あれでは、すぐに嘘がばれてしまう。あまりにも多くの人間を巻き込んでいるうえ、国際共同研究までしている。少人数で、こっそりやる。これが常道だろう。それにしても、もう少しうまく立ち回れなかったのであろうか。

記者は、相変わらず、くだらない質問を繰り返していた。

「実は、先日、北東大学で一九テスラの世界記録を達成したということの記事にしたばかりでして、確かに世界記録かもしれませんが、二〇テスラになったことが話題になるとは思えないのですよ。もちろん、先生の成果を認めないというわけではないのですが。何かこうインパクトが足りないというか。いい知恵はないでしょうか」

西郷は内心、その知恵をしぼり出すのが新聞記者の仕事だろうと思った。しかし、表向きは笑顔を絶やさず、辛抱強く、こう説明した。

「もちろん、素人目には、たった一テスラと思われるかもしれませんが、われわれ最先端の場で研究を行っている人間には、その一歩が非常に大きな前進なのです。しかも、世界記録を達成したわけですから、その辺を評価いただきたいと思います」

すると、記者のひとりが、こんなことを言った。

「なるほど、すると、記事にするときには、東都大学が世界記録を更新したという題目にすればよいわけですね。それならば、素人受けしやすい」

西郷は、内心、喜んでいた。こういう機転のきく記者ばかりであれば、自分も苦労しないのだが。

野中課長

西郷は、新聞発表の翌日、事務室がまとめてくれた新聞記事の一覧を眺めていた。予想したとおり、あまり大きな反響はなかった。

「まあいいだろう」

西郷は自分自身に言い聞かせた。

ここでは、新聞発表したという事実こそが大事なのだ。特に、予算獲得の際には、資料として記事内容そのものは載せない。つまり、プロジェクトの評価項目としてのプレス発表の欄には、新聞名と日付しか出ない。だから、記事の大きさではなく、どれだけの新聞が取り上げてくれたかということが大事なのである。

新聞をすみからすみまで読んでいるような人間はいないから、一面にでも出ない限り、その記事がどの程度の扱いかということまでは誰も気にしない。

すると、机の電話が鳴った。文化省の先端研究課の野中課長だった。

「西郷先生。昨日は新聞発表おめでとうございます」

野中は、役人にはめずらしく細かいところまで気がきく。

「いや、野中課長ですか。いつもお世話になっています。今回の成果も、野中君のおかげのようなものですよ」

西郷は、野中におべっかを使った。

なにしろ、予算を決めるのは役人である。少しでもおだてておかないといけない。下手に、機嫌を損ねるようなことをすると、予算がつかなくなる。

「そう言って、いただけると、先生の研究をかげながら支援しているものとしては望外の喜びです」

まずは、野中の機嫌は良さそうだ。そう西郷が安心すると、野中はとんでもないことを言い出した。

「ところがですね、先生。文化省の中には、先生のプロジェクトは、予算の割にはろくな成果が出ていないのではないかと苦言を呈するものもおりまして、対応に苦慮しております。

もちろん、そんなバカ連中は、わたしが一括しておりますが、ギャフンと言わせるためにも、やはり世の中をあっと言わせるような成果が欲しいというのが本音でしてね。ぜひ、先生には、今後がんばっていただきたいと思っております」

西郷は言葉につまった。

「そういう連中もいるでしょう。その辺のところは、重々承知しているつもりです」

そう言って、西郷はそそくさと電話を切った。

西郷は、不愉快になった。野中は、ていねいな言葉を使っているが、暗に、今回のような成果では不十分だと言ってきているのだ。文化省の他の部署から苦情が出ているように言っているが、野中がそう思っていることは明らかである。

慇懃無礼とはこのことだろう。野中は明らかにホームランを期待している。ヒットはいくら打っても成果とは認められないのだ。

曽根崎助手

西郷も、野中に言われるまでもなく、何か世間の注目を集める研究成果を出す必要があるとは感じていた。すでに、西郷のプロジェクトには一〇億円近い金を政府はつぎ込んでいる。もちろん、ある程度の成果は出しているつもりだが、世間の目はそれほど甘いものではない。

そして、何よりも、ライバル研究者の嫉妬心が脅威であった。西郷の研究プロジェクトに国が手厚い援助を与えていることを面白く思っていない研究者も多い。研究者にはプライドの高いものが多い。しかも、他人には厳しい評価を与える。自分のことは棚に上げて、すぐ他人の攻撃をする。

「あいつは金食い虫のくせに、ろくな成果をだしていない」
こんな批判は日常茶飯事である。いちいち気にする必要はないというものもあるが、常に注意を払っていないと、いつ足をすくわれるか分からない。

西郷は、ふと曽根崎の研究が気になった。湯川には、曽根崎がいったい何をやっているかを探るように命じているが、最近、曽根崎の様子が変わったと言っていた。何か、大物を狙っているようだ。

実は、西郷は曽根崎の研究手腕を高く評価していた。世渡りが下手なために出世していないが、研究者としての素質は、西郷よりもはるかに上ということも認識している。

西郷が博士課程に進学した時、曽根崎は研究室の助手になった。まわりの誰もが、曽根崎が研究室を継ぐだろうと思っていた。それだけ、曽根崎は優秀であったのである。西郷も、学生の頃は曽根崎の世話になった。

研究の指導を仰ぐと、曽根崎は常に適切な助言をしてくれた。当時、教授の太宰は偉くなりすぎており、研究室の運営は助教授の山根と助手の曽根崎に任せられていた。ただし、山根助教授は他大学の出身で、いずれはどこか別の大学へ移るものと思われていた。

曽根崎の研究は常に学会の注目を集めた。その頃、西郷は必死になって曽根崎に追いつこうとしていた。しかし、優秀な研究者になるには天賦の才が必要である。

まず、研究テーマを見つける段階で差が生じる。何が面白いかを見つけ出す能力。優秀な研究者は、この嗅覚が優れている。残念ながら、西郷には、それが欠けていた。

西郷が博士課程の三年になったころ、曾根崎と太宰教授の仲が険悪になったという噂が研究室に流れた。原因は、太宰の娘の優子であった。

実は、曾根崎のことを見込んだ太宰が

「娘の優子をもらって欲しい」

と曾根崎に申し出たのだ。もし、それが実現すれば、曾根崎の将来は保証されたようなものである。研究室の誰もが、曾根崎はその申し出を受け入れると思っていた。

というのも、太宰の家に研究室のメンバーが呼ばれた時、優子と曾根崎は、周りから見ても似合いのカップルに見えたからだ。西郷から見ても、優子は曾根崎のことを信頼していたし、曾根崎も優子のことを決して嫌いなようには見えなかった。

研究室の学生の中には、ひそかに優子に思いを寄せるものもいたが、曾根崎には敵わないとあきらめていたのである。しかし、曾根崎は、なぜか、この最高の縁談を断った。

西郷には、曾根崎の真意が分からなかった。しかし、この件をきっかけにして西郷の立場が変わった。自分にもチャンスが出てきたのである。ここで、太宰を喜ばすような成果を出せば、自分が助手になって、研究室を継ぐことができるかもしれない。運が良ければ、優子もものにできる。

西郷は、自分の容姿にはまったく自信がなかった。背も低いうえに、頭がやたらと大きい。顔も甘いマスクという表現からは、程遠いものであった。

だから、小さい頃から、勉強だけに打ち込んできた。同級生が、スポーツに興じたり、趣味に走ったり、女の子とつきあったりするのを横目でみながら、ひたすら勉学のみで励んできたのである。

「いずれ、お前らを見返してやる」

遊んでいる連中を横目でみながら、西郷は心に誓った。

西郷が、はじめて勉強で挫折を味わったのは、東都大学の入学試験に失敗した時である。自分では、かなり自信があったのだが、なぜか不合格となってしまった。そのショックはあまりにも大きく、それからの一年はまったく勉強に身が入らなかった。このため、次の年も受験に失敗した。

二浪して、東都大学にようやく入ったことが、実は、西郷に幸いした。まわりの人間が大学生活をエンジョイしているのには構わず、ひたすら勉学に励んだからだ。

最初は、自分は二浪もしているということで、まわりに対するコンプレック

スがあったが、それが、次第に優越感に変わっていった。同級生の多くは、とにかく、できが悪いのである。大学に入って安心してしまったということもあるのかもしれないが、勉強をほとんどしない。もちろん、東都大学といえ、入学しただけでブランドが得られるから、勉強などする必要がないのも確かである。西郷は、常に、学年のトップを守った。失いかけた自信をもう一度取り戻すことができたのである。

ところが、その自信も大学院に進んで崩れ去ることになる。曾根崎の存在である。実は、曾根崎は学年では四年上であるが、実際には西郷と二歳しか違わない。しかし、その研究者としての素質の違いは、あまりにも歴然としていた。西郷は、勉強と研究はまったく違うということを思い知った。勉強は、すでに分かったことを学習すればよい。ところが、研究は、未知の分野に挑戦しなければならない。先例がないのである。

曾根崎の研究に対するセンスは抜群であった。研究室でのディスカッションを通して、それをみずから体験した。曾根崎には適わない。そう思った。

西郷にとって救いだったのは、その頃セレンディプティという言葉を知ったことである。それは、研究の世界で成功するには、運が必要だということだ。もちろん、努力は必要であるが、研究のセンスがなくとも、もし神が偶然、自分に微笑んでくれれば、チャンスがないわけではない。過去のノーベル賞の受賞者は、研究者として優れているひともいるが、むしろ、神の偶然が微笑んだというケースが多い。